

## 現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化(5)

増 井 三 夫\*

(平成10年10月30日受理)

### 要 旨

スキンヘッズの若者とネオナチとの関係性は、奇異なことに、日本のドイツ政治学者とドイツの知識人にとって、論外のことであった。しかしその一方でスキンヘッズの外国人襲撃を「どのように把握するかについて」両国の「専門家は頭を痛めている」と告白されている。その大きな理由はネオナチの顔がドイツの日常性に見えないからだ。ネオナチの日常性は空間的である。ネオナチの周辺にいるスキンヘッズこそがこの空間を共有している。そしてその内の世界観を共有する者がネオナチ・ユーゲントとなっていた。専門家はこの関係性について峻拒しついで寡黙した。なぜか?そうした専門家にいまひとつの問題提起を試みたものが本報告である。ここでは一人の若者とネオナチとの関わりをかれの声から読みとる。そのかれの口から明るみにだされたものは、これまでのネオナチ・ユーゲントの軌跡を再現し、そしてアイデンティティの構築をネオナチに果したヒストリーだった。

### KEY WORDS

Neonazismus ネオナチズム

Neonazi-Jugend ネオナチ・ユーゲント

#### はじめに

1. ネオナチ・ユーゲント文化「解釈」の可能性
  2. 転換期前後の若者の日常生活世界
    - (1)アイデンティティ「危機」・方向性「喪失」
    - (2)崩壊が進む家庭生活
    - (3)学校内暴力の日常性
    - (4)価値多元主義にたいする不適応  
(以上 第15巻第1号)
    - (5)「最高の価値」の実行
    - (6)強力な世界観への志向  
(以上『西洋教育史研究』第24号)
  3. ネオナチの組織と行動
    - (1)ネオナチ組織の概観
    - (2)指導原理
    - (3)東ベルリンのネオナチ組織
    - (4)ヴァイトリング通り122番地
    - (5)ドレスデンのネオナチ殉教者追悼行進
    - (6)ネオナチ組織周辺の若者
    - (7)ネオナチ事件簿
    - (8)「犯人は単独」か  
(以上第15巻第2号)
  4. あるネオナチ・ユーゲントの日常性
    - (1)ロストック放火事件
    - (2)メルン放火事件
    - (3)ゾーリンゲン放火事件
    - (4)ゾーリンゲン放火犯少年の精神鑑定  
(以上第17巻第2号)
    - (5)立ち上がる市民
    - (6)ネオナチ周辺のある若者の日常性
    - (7)ネオナチ・ユーゲントの日常性おわりに一問題の提起ー  
(以上第18巻第2号)
- 附論 日本のジャーナリズムのネオナチ報道

---

\* 教育基礎講座

## (5)立ち上がる市民

メルンとゾーリングゲンの襲撃事件はトルコ人の自己意識にこれまでとは異なる質的な変化を惹き起こしたことはすでにのべた。一方、この事件はドイツ人の自己意識にいかなるインパクトを与えたのだろうか。これを知ることは容易ではない。だが従来このようなテーマが成立しえなかった新聞にこのインパクトが論じ始められた。ゾーリングゲン襲撃事件から9日間に「ドイツ」は、「熱にうなされたように」繰り返し報道されるパロール「襲撃、抗議、騒乱」の数以上に、「変わった」のだと。

とくに、ゾーリングゲンでの殺人は、ドイツ市民の日常性に可視できるインパクトを与えた。それは、ドイツ市民が思いも及ばなかったトルコ人の姿であった。つまり、「10年以上黙して抑えてきたトルコ人が、突如、己を強く表出して同じ市民としての権利を要求した」のだ。だが、ドイツ人のゾーリングゲン襲撃は、同時に、「悲劇的な方法で」、とりわけトルコ人若者たちにドイツ人にたいするレサンティマンを増幅した。これも若者たちにとって初めての公然たる自己主張の表出であった。ネオナチの襲撃にたいして「武器で自己防衛すること」を「正当である」と若者たちは主張したのであった。その若者たちはゾーリングゲン襲撃にたいして旧世代が行動しなかったことにも強い不満を感じていた。

トルコ人住民に市民権を与えることは、確かに、ドイツ人とのあいだの政治・経済制度上の差別を排除し、これに政治的な決着をつけることができるであろう。だがその決着はドイツ市民の日常性において反トルコ人・差別意識をどの程度取り除くことができるのであろうか。このテーマを論じた『デア・ターゲスシュピーゲル』紙論説員フランク・ヤンセン氏は、反トルコ人・差別意識はまったく「普通のドイツ市民」の日常性に通底する「ファシズム」に発するもので、その除去はたとえ国家権力であっても、この「日常性に潜むファシズムが除去」されないかぎり、「成果をあげることはできない」と結論づけている<sup>1</sup>。それではこの「除去」はどのようにして達成されるのだろうか。これは容易なことではない。だが、確かに言えることは、いかにしてトルコ人もドイツ市民であることがトルコ人とドイツ人の共通の日常感覚となることができるかにある。その第一歩はトルコ人とドイツ人が言葉と行動でそれを表出することから踏み出された。その舞台はベルリンの街であった。

ベルリン市クロイツベルク地区は多文化空間を思わせる。その住民の約3分の1はトルコ人である。地下鉄U1のプリンツェンシュトラッセ駅（高架）を過ぎるころから終点のシュレージェセストーア駅までトルコ風の建物群が多く目に入る。シュレージェセストーア駅を降りて高架下の道路を渡り、まっすぐ歩くとすぐにシュプレー川にぶつかる。そこから対岸を見渡すことができる。旧東ベルリンである。川にそって現在でも壁が残っている。再び駅の方にむかって歩くとトルコの民族衣装が目に入ってくる。ここはまさしくトルコ人町だ。地下鉄U7のズドシュテルン駅に下車してプリンツェンシュトラッセ駅に向かって北上する。途中に美しいモスクを発見することができる。そこの近くに踏み入ると異文化圏に入り込んだ錯覚を覚えた。クロイツベルク地区のどこを歩いてもここは文字通りトルコ文化とドイツ文化が共生する多文化空間である。

6月3日、そのクロイツブルク区庁舎前でゾーリングゲン犠牲者にたいする追悼集会が開かれた。2千人になるドイツ人とトルコ人が参加した。まずベルリントルコ領事モハメト・キナル

氏が挨拶にたった。領事は参加者に、ベルリン市で両国の文化がこれまで共生してきたことの重要性を強調し、さらにネオナチにたいして「民主主義的に反対する立場をとって行動する」ように訴えた。クロイツブルク区長ペーター・シュトリーター氏（SPD）も同様に、ゾーリングゲン襲撃を「クロイツブルクの多文化共生にたいする挑戦である」とのべ、つづけて今日のドイツにネオナチ・ユーゲントの襲撃がうまれる「風土」が存在することを指摘し、これが放置ないし維持されていることにたいする自己自身を含めた政治家の責任の大きさを率直に認め、早急に二重国籍実現のために努力することを言明した。このように、「異なった文化が併存かつ共存する」事実を共通の土台として、それが制度の次元においても成り立ちうる保証の実現を求めて、いまだトップレベルではあるが、相互に厳しい批判と自己反省を伴いながら、対話を重ねる第一歩がこの広場で踏みだされた。わたしはこうした率直な批判空間の出現に羨望を禁じえなかった。

クロイツベルクはゾーリングゲン襲撃以降この方向をアピールする発信地の役割をはたしたようだ。異文化の共存空間から、他文化を拒否・排斥・否定する「風土」にたいする「民主主義的な反対」運動が、ドイツに棲みつくネオナチの日常性を排除するもっとも強力な力として、立ち現れてきた。他の官庁や機関も1分間業務を止めて連帯を表明した。旧東ベルリンの赤の市庁舎内では黙禱し、市内最大のデパートであるカー・デー・ヴェーでは販売業務を数分間停止した。さらにこうした動き呼応して18団体が円卓を設定し、ここで外国人と政治家との対話が始められた。また市内多くの通りと交差点は市民たちが自発的にゾーリングゲン襲撃に抗議し、論議するフォーラムに変わったように思われた。クロイツベルク区庁舎前の集会参加者約3百人はさらに13時にヘルマンブラッツへ移動し、ベルリン市で5本の道路が集まりもっとも交通量が多いエルンスト・ローター・ブラッツにも約70人が人の鎖を作った<sup>2</sup>。こうした抗議・論議する場がようやく日常的な生活空間に登場した。わたしは、幸運にも、その思いに一層強い確信を与えられた光景の前に立つことができた。

6月8日午後4時よりベルリン自由大学で「人種主義についての行動日」がもたれた。ベルリン自由大学には非常に多数の外国人が在籍している。ここで主張された声をひろってみよう。われわれはロストック、メルンそしてゾーリングゲン襲撃に驚きを交えた狼狽を感じた。燃える難民収容施設はすでにドイツの日常性となっている。だが驚愕・狼狽だけではなにも変えることはできない。ドイツの政治家も同じ心理状況にある。ましてネオナチは亡命法改正で人種襲撃を正当化している。われわれはなによりもまず自己自身の内面と日常性を直視してみよう。「わたしは人種主義者でないといいきれるのか」、「わたしはどのようにしてかつどこで人種主義を体験しているのか」、「わたしは人種主義にどのくらい敏感であるのか」、「わたしは人種主義に反対する行為を自覚的にとっているのか」。いまこそわれわれは人種主義と、一人一人の人格と日常生活実践の局面で、そして制度・国家・政治の局面で、対決することを始めよう。学生の日常生活世界にもネオナチと対決する自発的なフォーラムが生まれようとしていた。このフォーラムに自己と批判的に対峙するいま一つの若者文化をみることができた。この文化こそがネオナチ・ユーゲントの文化をラディカルに批判し、それを生みだす土台を否定する状況を作りだすことができる、と予見しないではいられなかった。

## (6)ネオナチ周辺のある若者の日常性

### アイゼンヒュッテン市での襲撃現場

1992年9月4日夜から5日未明にかけて、アイゼンヒュッテン市の難民収容施設は若者によって襲撃された。この現場を撮ったシーンを見ると、いずれも若者は警官に投石している。警官は催涙弾で応戦していた。この中にいた一人の若者を母親が連れ戻そうとしている。若者は逮捕前に母親とともに帰宅した。これを目撃していた一人のジャーナリストがその若者と両親に同市のレストランでインタビューすることに成功した<sup>3</sup>。ここではその主要な箇所を採録しながら、その若者の文化の読み取りを試みてみたい。記述はプロトコルにそくしながら進められる（－はインタビュアー、括弧内は引用者の補足をそれぞれしめす）。

母親「止めなさい、とわたしはいったよ。一緒に家に帰ろう。お前の仲間は、お前と一緒に帰ってもわからないよ。そしたらお前がいったよ、わたしがすぐに離れなければ、もう家には帰らないとね。お前は石を拾うとした。そのときわたしはお前の襟裳をつかみ、引きずった。カメラマンがそこに突然現れたんだよ。」

若者「カメラマンをおれが追い払った。」

母親「わたしは一人で帰宅した。だがお前はすぐにきた。」

若者「なにももうおきなかったからだよ。」

以上は襲撃現場から帰る直前の様子であった。この若者の言葉からかれがネオナチズムの思想をもって行動したとは想像さえもできない。フーリガンとみられてもおかしくない。この印象はインタビューが進んでいくと、ある時点まで、一層鮮明になっていく。

### 父母の反応

母親「ありがたい。カメラマンが写真を新聞に載せることはなくなったね。」

－「なぜあなたはいまありがたいと言ったのですか。」

母親「わたしたちはアイゼンヒュッテン市でよく知られているんですよ。」

－「あなたは止めなさいといったんですよ。大勢の人はいませんでしたよ。」

母親「問題は、息子がそもそもそこにいたことなんです。息子がわたしの言うことを聞いてくれなかったことがね。わたしは辛いですよ。息子はそこへ行くべきじゃなかった。わたしたちは待っていた。だが来なかった。わたしの夫はそのとき寝ていましたね。わたしが意を決して出かけることに夫はまったく理解をしてくれませんでした。夜中の1時でした。仕事仲間がわたしが出た後で夫に声をかけたんですが、夫は恥ずかしい思いをしていましたよ。」

父親「朝食のテレビに出ていたよ、しかも ZDF（ドイツ第2テレビ局）にね。」

－「なぜあなたは恥ずかしかったのですか。」

父親「わたしは仕事場ではみんなに知られているんですよ。」

母親「仲間がいていたよ、あんた、息子が逮捕されるまえにつかまえておきなさいよってね。」

父親「多分そう言うだろう。」

母親「この町の人たちは皆、外国人がここにいることに反対しているけれどもね。」

－「あなたがたはどんな仕事に就いているのですか。」

父親「設備の運送だ、EKO（アイゼンヒュッテン製鉄所）で20年間ね、交代制の。」

母親「わたしはEKOの臨時工です、6月までのね。溶鉱炉4本が解体されています。わたしは薄鉄板を加工しています。」

－「あなたも仕事にも息子さんのことについて言われましたか。」

母親「いいえ。この新聞記事だけです、話していたのは。そのときわたしに仕事仲間が言っていたわけ、あんたもこの記事の母親のようにふるまえばいいのにとね。」

－「あなたは何も言わなかったのですか。」

母親「そうです。」

－「以前から外国人との対立はあったのですか。」

母親「かなり前に騒ぎがありましたよ。」

若者「そのときおれは加わらなかった。病気だったからね。」

母親「そのときは本当によかった。」

以上の発言から見えてくるのは、難民収容施設の襲撃に加わっている息子、これを必死に阻止しようとする母親、そしてこれに消極的な父親からなる家族の構図である。母親は、たとえ夜中であっても、一人で襲撃現場に出かけ、息子を引きずり出そうとする。この姿にまず眼を奪われる。母親は日頃から息子が難民収容施設襲撃に加わらないように注意を払っている。病気で行けなかった息子に安堵する母親でもある。それに比して父親の無関心さと存在感の希薄さが伝わってくる。父親は世間のみを気にしている。一体この家族の日常になにがおこっていたのだろうか。

### 若者の過去・現在

－「難民収容施設にはどんな人がいるのですか。」

若者「テレビで見てわかるように、何人かは頭に布を着け切れた布をまとめてにげだしていた。」

－「あなたはなにか聞きましたか。」

母親「いや。聞かなかったね。」

－「なぜ難民収容施設の襲撃となったの。」

若者「そこははじめから難民で溢れていた。だけどおれたちは石を投げなかった。石を投げすることはロストック（難民収容施設襲撃）後に初めてやった。」

－「それはあなたにとっていやなことではなかったの。」

若者「ちっとも。」

－「子どもたちにも石を。」

若者「石は国境警備隊へ投げたよ。」

－「もしそこに警備隊がいなかったら、石は（難民収容施設の）窓へ投げられたかもしれないね。」

若者「守備隊がそこにいなかったら、仲間らはもはやそこにいなかったと思うよ、ずらかったと思うよ。」

—「一体どこへ。」

若者「山の方さ、おれが知っているのはね。」

—「山へ。ここは海面と同じ高さだぜ。なぜきみはそんなに反抗的なんだい。」

母親「息子は反抗的ではないですよ。若者というのは感情的なものでしょう。息子はそこにいったと言っているだけです。そういうの、はやりなんですよ。あなた息子をみてくださいよ、一体息子がなにをしたって言うの。」

—「わたしだっていじめようとしているのではないですよ。あなたが息子さんをととても愛しているのは正しいと思いますよ。」

母親「わたしたちはいい関係にありますよ。ただ息子が時々消えるだけのことです。息子は15歳になったばかりです。その前はいつもわたしたちと一緒にでした。13歳まではね。」

—「そのときから息子さんはあなたがたのもとから去ったのですか。」

母親「統一のころですよ、息子が右翼にのめり込んだのは、わたしはそう思っていましたよ。」

—「学校へはどうしているんですか。」

若者「もう面倒くさくなっている。」

母親「第5学年までいったよね。」

若者「おれはそれ以上行かなかった。宿題をしなかったし、何も勉強しなかった。」

母親「息子は、わたしが仕事から帰っても、いませんでした。」

—「教師は変わらないままだったの。」

若者「確かに変わらなかった。」

—「きみは教師をからかった。」

若者「統一前にやっていたね。」

—「両親ときみと会話があったかい。」

母親「いつもさ。ほとんどわたしだけど。夫はしばしば夕食時間にはいませんでした。どこかの夫も夜勤でお金のために働かなければならなかったんですよ。以前わたしも夜勤で圧延工場で働いて、日中木材現場でこんなに重い木材を運んでいました。息子が学校へ行くようになって、わわたしは日勤にしてもらおうとしました。他の人はそんなことしたがりませんでした。わたしは総管理人のところまで行きました。かれはわたしに機械の油差し、清掃または裁縫の仕事をもちだしたんです。だけどわたしは10年制学校を卒業していたし、それに専門労働者だったんですよ。わたしは裁縫の仕事をしましたよ、製鉄所でいい仕事をみつけるまではね。そこではわたしは正規の短時間労働者になりました。いまは臨時工です。」

—「きみはどこで仕事をみつけたの。」

若者「おれは8学年で退学した。いまおれは職業訓練所の上級コースにいるよ。来月おれはペンキ見習い工になる。」

—「もっと学校教育をきみはのぞまないの。」

若者「一体おれはなにを知るべきなの。」

—「もうちょっとなにかを頭のなかに詰め、世間で起こっていることをいま以上に知るチャンスがひろがるじゃないの。」

若者「世間で起こっていることをおれは知っている、それは難しくない。金が世間を決定している。金をもっている者が力をもっている。」

－「多くの人はそのチャンスをもっていないよ。」

若者「それが問題さ。」

若者が「右翼にのめり込んでいった」のはドイツ統一前後のころのようである。そして若者にたいする母親の溺愛に近い情愛が一層鮮明になってきた。若者が悪いのは「右翼にのめり込んでいった」ことだけである。それを除けばすくなくとも母親との関係は良好であった。このように母親は語る。だがその口調にはそう已に信じ込ませようとする気負いもうかがわれるであろう。若者の過去の学校と現在の仕事の話しになると、それは母親にそれほど気にならない。若者と父親との会話が原因を語るときに、再び母親は話しだす。その責任は、父親自身ではなく、仕事の勤務体制と金を稼がなければならない父親の役割＝現在に押しつけられ、同時に自分自身の仕事も語りだす。母親と若者そして父親に共通の日常性がこの家族から語られない。母親の若者にたいする溺愛にもかかわらず、この親子関係には信頼と親密に支えられた規範が解体し、父親の存在感の希薄（権威の喪失）もみられる。この家族関係は若者の行動様式にいかなる意味をもったのか。ここまでではまだ見えてこない。

しかしよいよ若者の世界観が語られはじめた。かれは10年制総合技術学校を中退し、職業訓練所に通っているが、学校教育にほとんど期待をしていない。また体制崩壊直前における旧東時代の学校生活では先生を「からかう」と即答しているように、ここにはあの強い価値規範が解体に瀕していたことをうかがわせる。そのかれがためらわずに語ったことは、世間を支配するものは「金」と「力」だ、であった。それはまさしく強者の論理である。

「外国人はいない方がいい」

－「きみはここにきて生活をしようとする難民よりはるかにうまくいっているよ。」

若者「世界には非常に多くの国があるのに、なぜかれらはここにくるのかい。」

－「統一前にアイゼンヒュッテン市に外国人はいなかったの。」

若者「ベトナム人とアルジェリア人さ。ベトナム人夫婦もいた。」

－「あなたの家族はどこかの外国人と私的な関係をもっていますか。」

母親「いいえ。」

若者「ドリス叔母さんの旦那は。」

母親「あ、そうだね。」

－「ドリス叔母さんのご主人とは。」

母親「ユーゴスラヴィア人です。わたしは外国人に全然反感を持っていません。わたしたちは一緒に働いていました。」

－「だけど一緒に休まなかったのでは。」

母親「わたしの友達はモロッコ人と一緒になっていて、かれとわたしたちは一緒に休んでいましたよ。わたしたちは外国人に反感をもっていません。かれらがここで働いてもそれからまた辞めてもあるいは勉強をはじめてもね。それはベトナム人の場合だってそうですよ。だけど外国人はここに留まらないほうがいいと思いますよ。」

若者「難民収容施設に入れるのは7百人だけれど、2千人もいるんだぜ。」

母親「外国人女性がやってきて、ゴミ箱から服を拾い出すことを仕事にしていますよ。」

若者「裏に公園がある。百以上のゴミ箱がこじ開けられているよ、その女性たちが来てから

ね。」

母親「以前わたしはポーランドで休日宿泊所によく泊まったですよ。子どもを連れてね。わたしたちが着いたときに、ポーランド人は叫んだよ、ナチは出ていけとね。」

父親「それはチェコとハンガリーでもあった。」

母親「だけどわたしたちはナチを支持していませんよ。わたしはそのときは大きくなかったしね。」

父親「それは歴史の事実だよ。」

母親「しかしそれはもう終わったことですよ。その連中は、わたしたちが戦争で負けたことで、わたしたちを免じてくれないのかね。」

若者「外国人労働者の子どもたちはどっちみちまた帰国するだろうさ。なんかさ、集まって西ベルリンでバンドを作っていたよ。ブラック・パンサーってやつだよ。」

ー「子どもたちはここで生まれているよね、かれらは自分を外国人とっていないよ。かれらが帰国することはまずないね。」

若者「そういうことになるかもね。」

母親「どのくらい外国人がドイツで生活しているのですかね。」

ー「ほぼ1パーセントですね。フランクフルト・アム・マインのような都市では25パーセントです。」

若者「それにフランクフルトでは犯罪組織もあるよ。」

これまで若者が語る言葉から、かれを難民収容施設放火へ動機づけたものを確定することは難しい。またかれの攻撃的な行動を予想させるものもない。ここで、改めて、若者と母親の発言の内容を整理してみると、いくつかの体験的な事柄が交差している。①統一前にもすでにベトナム人とアルジェリア人が当市に滞留していた。叔母の主人はユーゴスラヴィア人で、そのことを母親がすぐに思いだせないくらいに日常化していた。「わたしは外国人に全然反感を持っていません。わたしたちは一緒に働いていました。」という母親の言葉がそれを語っている。②一方、その母親は、ポーランドでなげかけられた非難（「ナチは出ていけ」）にたいして、そのとき自分は幼かったという理屈でナチを支持していなかったと弁護し、ナチの侵略については「それはもう終わったこと」でしかもドイツの敗戦で免罪されてもいいんじゃないかと考えていた。③統一後、難民収容施設は収容能力の3倍弱の難民で溢れていた。若者は施設からはみだすほどの難民の数に圧倒され、母親はその難民の女性がゴミ箱を荒らして衣類をあさる姿に不快感を抱いていた。④さらに難民は西ベルリンでロックバンドを結成していた。それは若者の羨望を刺激した。⑤その一方で、若者は、難民が大都会で犯罪組織を作っているという情報らしきものを入手し、難民が悪であるという観念を吐き出していた。⑥当市では外国人労働者が市民の職場を奪っているという事実は認められていない。

これらの事柄が若者と母親の日常性に共有されていたとみて誤りはないであろう。これらの事柄を語るさいに、身内の外国人にたいする差別・排除の感情は、「反感をもっていない」と語るように、現れていないが、しかし難民にたいしては③から明らかなように、不快と蔑視が読み取れる。「清潔」はネオナチのスローガンであったし、ロストック事件の誘因（さらにネオナチにたいする市民の共感をよぶ背景）であった。若者の場合には、さらに、③と④から見られるように、難民にたいする羨望の感情と、難民が犯罪組織を作っているといういわゆる難民悪



人観が表明されている。この事実認識と感情も若者を難民収容施設襲撃へ駆り立てた要因の一部をなしていたのであろうか。家族関係はこの要因に関わってこないのか。さらに②との接点はないのか。

### 難民にたいする本音

母親「わたしたちのところでは今のところなにも変わったことはないね。今日新聞で銑鉄操業が休止するらしいとのっている。そうなればお休みだね。メレマン（連邦経済相）とシュトルペ（ブランデンブルク州首相）はここへきて言っていた。わたしたちはEKOが閉鎖することを望まないね。」

若者「選挙前、かれらはまったくナンセンスなことを言うだけだったよ。共和主義者はすでに統一の時に言っていたよ、ポートは満員だ、とね。」

－「きみが考えていることを代弁している人がいるのかな。」

若者「あなたはなにが言いたいのか。」

－「今日の襲撃のようなことを指導する人さ。」

若者「勇敢な人がいたよ。その人は亡くなったけどね。その人について政治家はナンセンスなことをいろいろ言っていたな。」

－「お父さんたちの間ではどうですか。あなたが信頼する政治家がいますか。」

父親「いや。一人もいないね。」

－「だけどあなたは以前、党に入っていたでしょう。」

父親「そうだよ。みんなそうしなければならなかった。」

母親「そうではないさ。わたしが好きなシュトルペがそうよ。かれにこんど投票するつもりだよ。」

－「前社会民主党議長ハンス・ヨッヘン・フォーゲルが当市にやってきて難民収容施設に一泊しましたが、これをどんなふうに受けとっていますか。」

母親「そのことをわたしたちはまったく知らなかったですよ。わたしたちの間では、政治家は一度直接難民たちと会ったほうがいい、という話になっていますよ。」

若者「政治家連中はボンに2千の難民を受け入れると言っている。」

母親「わたしたちはかれらと一緒に生活しなければならないの。」

－「あなたがたは収容施設の近いところに住んでいるのですか。」

母親「いや、かなり離れて住んでいます。」

若者「それほど遠くないよ。だれだって毎日街中でかれらをみているよ。昨日もゴミ箱のところに一人いたよ。」

－「あなたがたは統一を歓迎していますか。」

若者「しているね、だっておれは西側へ行けることができたからね。」

父親「結局これまでのことが全て終わったからね。」

母親「わたしはいつも西側のテレビをみていました。わたしは事実を見ようとしていました。」

ここにきて難民にたいする表現がすこし変わりはじめた。その転機は1990年10月のドイツ統一であったようである。若者はどうやら統一前後に極右の共和党と何らかの接触をもっていた

ようである。かれは統一時に難民の入国がドイツですでに限界状況あるという共和党の主張を支持し、政治家が難民収容施設で一泊したり対話をしていることをナンセンスと非難していた。しかも「ボートは満員だ」というナチ時代にユダヤ人に浴びせたスローガンを持ち出してである。いまや若者は難民との距離を、母親に比べて、微妙ながら近くに、もちろん否定的な意味で、感じとっている。難民の存在が若者の日常生活感覚からイデオロギーの世界で語られはじめた。

### 若者の日常性に潜むもの

若者「クロイツベルクではドイツ人の仕事が全然なかった。おれはカセットを買いたかったが、それはトルコ語で書かれたものばかりだったよ。それにアレクサンダープラッツ経由でいけば、トルコ帽子だらけさ。」

－「どうしてきみはいつもトルコ人だけに目がいて、たとえばイタリアのピザトースト、ギリシャのレストランが目にはいらないの。」

若者「そういうのおれは全然みたくないね。まだDDRだったとき、あんたはいつでも焼きソーセイジを買うことができたでしょう。ところがいまでは食べたくとも探さなければならないよ。」

－「きみは一体なにが食べたいの。」

若者「ライス入りの鳥肉のシチューさ。ケバブ（イラン風焼肉入りハンバーグ）をいつもだね。」

母親「わたしたちは豆入りの羊肉もたべています。」

－「きみは長靴とボンバージャンパーをもっていますか。」

若者「ボンバージャンパーを一着もっている。長靴ももっているよ。」

母親「おまえは、父親がそれに絶対反対していることを、知っているのだろう。わたしはね、いつも少しづつ話してあげるようにしています。最初わたしはジャンパーを切り刻んでやったんです。」

－「あなたはなぜそれに反対なのですか。」

父親「わたしは簡単にいえばそれを全然認めていないからですよ。」

－「だけどあなたはどうすることもできないのですか。」

父親「百回言ったよ。どうしたらいいんでしょうね。」

－「あなたが若かったときはどうでしたか。髪は長かったですか。」

父親「長かったものがいたね。」

母親「夫は子供時代を忘れてしまったんですよ。」

父親「わたしたちは違った教育をされていたんですよ。」

若者「両親は以前から不満を話していたよ、そして両親は今日も同じように文句をいっている。みんな言いなりになって、嘘を言われてだまされていたんだよ、どこでもさ。政治家と工場のボスにさ。」

－「きみはだれを信頼しているの。」

若者「仲間だよ。」

母親「両親ではないのかい。」

若者「もちろんだよ、おれはものすごく信頼しているよ。」

－「きみや両親が幸福に生活できるにはなにがなされなければならないのだろうか。」

若者「難民にたいして公正な法が作られなければならない。みんながこれに従えば、こんなに大量の難民が収容施設に来なくなるよ。ある国から一人くらいだったら政治迫害でなくてきても、一掃されることはないさ。それから工場が建てられることだよ。これはもうずっとなかったからね。それから他の国に援助することを止めるべきだね。それは無駄だよ。そうさ、おれだったら他のことに使うだろうね。それからドイツの領土だったところが返還されるべきだよ。」

－「なぜ領土が必要なの。」

若者「ドイツではアパート不足が大変じゃないの。」

－「だけどみんな住んでいるじゃないか。」

若者「ポーランド人ならば、ポーランドへ行くべきだよ、ドイツ人ならばここに住むべきだよ。ポーランド人はずっと前に作られた巣にいたんだからさ。」

－「あなたがたは、息子さんが話しているとき、悲しそうに見ていましたね。」

父親「息子はわたしとは関係ないよ。」

－「あなたの子どもさんですよ。」

父親「わたしは自問しています、どうしてこんなふうになったのか。」

若者「ドイツが再建されるとき、東側も再建されることができる。そのときおれたちのドイツはより大きな国家となるんだよ。」

－「なぜきみはそんなに大きくなることを望むの。」

若者「イスラエル人はドイツについて文句ばかりいっているよ。」

－「きみは、ドイツがそんなに大きくなるべきだと、なぜ望むのだい。」

若者「なぜドイツがそんなに小さくていいって言うの。」

－「だが全然小さくないよ。もっと小さい国がたくさんありますよ。」

若者「ドイツ人はいつも降伏が早すぎるんだ。おれはそれが理解できないよ。ドイツ人はもちろん誇りをもってはいるよ。たとえばドイツの歴史にね。だけどそれは他の国を手に入れていなかった歴史じゃないか。」

母親「お前はそれを一体どこから仕入れたのさ。」

若者「そんなことはいろいろな本に載っているよ。」

－「きみは家でどんな風に住んでいるの、きみの個室はあるの。」

若者「4部屋あるよ。おれのはおれだけの専用さ。ベット、机、タンス、椅子。観葉植物と花台。」

－「きみは一日どのくらいそこで過ごすの。」

若者「いま、おれは働いていないから、11時か、12時に起きる。それから仲間のところ行って、わいわい喋って、ビールを飲んで、たまにあっちこっちへ出かけるよ。」

－「夕方は。」

若者「また仲間と会っているよ。」

－「夜は。」

若者「そうだね。仲間と一緒にいるよ。」

－「なにをしているの。」

若者「おれたちは楽しく喋っている。ガレージの中に座って音楽を聴いている。ときどきグーベンのディスコへ車でいく。」

- 「そこにポーランド人がいたら、きみはかれらを攻撃するかい。」  
若者「そんなことは起きないよ。」  
—「89年以降きみにとってなにか変わったことがあったかい。」  
若者「多くのことが変わった、いままで以上のことができるようになったよ。」  
—「しかしきみは全然なにもしていないとずっと話しているよ。」  
若者「そうたびたびは何かが起こるものでもないよ。」  
—「きみは、両親と同じ歳になって、どんなふうになりたいか、想像したことがあるかい。」  
若者「想像かい。」  
—「家族のこと。」  
若者「ああ。車、仕事、子どもだね。」  
—「どんな女性でもいいの。」  
若者「いいや、ドイツの女性だね。」  
—「きみは遠くヘドライブしたいかな。」  
若者「来年の夏おれたちは仲間でブルガリアヘドライブするんだ。」  
—「夢の国はあるかい。」  
若者「アフリカかな。荒野を走ることさ。」

ここでも、改めて、父親の威厳の喪失と若者にたいする無力感さえ漂ってくる。父親は「政治家と工場のボス」に「嘘を言われてだまされていた」と若者にみられていた。そして、同時に、その若者の口から徐々に、かれが同一化している世界（難民にたいする感じ方・接触の仕方・排除の論理）が語られはじめた。それを特徴づけるものは、一つに、難民にたいする明確な排除であり、いま一つに、強者の論理である大ドイツ主義である。難民はここではトルコ人とポーランド人に限定されてくる。クロイツベルク地区はすでにみたようにトルコ人街である。ここではじめて足をふみいれた者はだれでもトルコ人の文化に眼を奪われるであろう。自分が買いたいカセットもトルコ語で書かれているし、ケバブをどこでも口に頬張ることができる。若者はここで職を得たかった。だが「ドイツ人の仕事が全然なかった」。若者の口から難民流入を法的に規制すべきという主張が語られる。ところが途中から難民がポーランド人になる。それを境に、若者から強烈な、母親も初めて耳にする、世界観が表出された。ポーランド人はゲットーにもどればいいという、これまで禁句であった言葉が飛び出した。さすがに両親は悲しそうな眼差しを若者に向けた。なぜだろうか。両親の知らない世界に若者が立っていたからか。若者はさらに続けて、ドイツが大国になるべきだと主張し、ユダヤ人がドイツについて文句をいうことにその正当性をあげる。この考えを結びつけるものはドイツが戦争敗北をあまりにも早く認め、併合した領土を失ったにあるようだ。母親には予期していなかった言葉だった。その母親はナチにたいする責任をすでに自己解消している。「お前はそれを一体どこから仕入れたのさ。」若者は本からだと返答した。

ここで、ナチズムのユダヤ人排斥をモデルとするイデオロギーによって状況を読もうとする若者の思考のパターンが現れてくる。若者はスキンヘッドの服装（長靴とボンバージャンパー）をして仲間と午後以降の時間を過ごしている。そのかれらに強い信頼をおく。母親が「両親には」と問うたときに、あわてて「もちろん」と返答していた。だが若者の仲間の絆は強い。いったいその強さはなにに起因しているのか。

## (7)ネオナチ・ユーゲントの日常性

## 共有される日常性

いま一度『トルコ毎日新聞』ドイツ特派員ディレク・ツァプトシオルグーロッゲさんの警句の一部、「ネオナチ・ユーゲントは路上では見えてこない、殺人を犯したときに初めて見えてくる」をあげておきたい。じつは、この見方はトルコ人だけのものではなかった。これもすでにみたが、『デア・ターゲスシュピーゲル』紙論説員フランク・ヤンセン氏もこの現象をドイツの「日常性に潜むファシズム」の現われとみていた。こうしたジャーナリストの眼は確かにネオナチ・ユーゲントの、およびその周辺の若者の、日常性をとらえていた。メルン市のディスコには、スキンヘズとトルコ人に混じってネオナチ・ユーゲントの指導者格のペータースも馴染み客だった。アイゼンヒュッテン市の若者も、ポーランド人はゲッターへ戻るべきと語る一方で、ディスコではポーランド人と一緒にいる。

だが、そうした若者は、いま一つ、ジャーナリストの眼から隠された精神史を持っていた。そのことは、アイゼンヒュッテン市の若者の口から語られたものであった。その精神史とは、母親と父親との関係史であった。かれの父親にとって、ドイツ統一は、新たな始まりではなく、「結局これまでのことが全て終わった」ことを意味した。そして、統一後にネオナチの行動に走る「息子はわたしとは関係ないよ」と言い放つ。母親の溺愛にたいして父親の権威は喪失していた。ドイツ統一前から現在まで、15歳の若者には、父親にたいする愛と尊敬および従順な服従と反抗を体験しない思春期があったのだ。この体験とDDRさらに教師を含めた権威への不信感と嫌悪感、これが若者の精神史を特徴づけているようだ。

## トラウマ父の存在(感)の喪失と憧憬

外国人を襲撃したスキンヘッドの精神分析はゾーリンゲン放火事件犯クリスチャン・Rのケース以外に目にすることができていない<sup>4</sup>。だがクリスチャン・Rの精神史はスキンヘズの行動を動機づける因子が、複数であることを物語っている。その複数性は「危機社会」からの外的要因では説明しえないものである。そこでクリスチャン・エグガースのクリスチャン・Rの精神鑑定をモデルとして、ともにネオナチ「戦士」であるアイゼンヒュッテン市の若者の言葉を、若きネオナチリーダーであったインゴ・ハッセルバッハの「告白」をも参照して、いますこし検討しておきたい。

クリスチャン・R、アイゼンヒュッテン市の若者そしてハッセルバッハに共通するものは、父親の存在(感)の喪失と憧憬である。クリスチャン・Rは、父親が犯罪者であったと告げられたこと以外、「お父さんはあなたが生まれるまえに死んでしまった」とその存在は一切否定されてしまった。ハッセルバッハ(幼児期に寄宿舎で過ごし、母は離婚、少年時代を祖父母および母親と継父のもとで過ごす)は26年の人生で父親と過ごしたのは「わずか5ヶ月にしかすぎない」。「お父さんと呼んだことが一度でもあったかどうか、その記憶すらない。<sup>5</sup>」この両者には父親の存在と存在感がない。だが両者ともに理想的な父親への憧憬が疼いていた。ハッセルバッハは前者のことばの前には「あんたを侮辱せずにはいられない」が語られていたが、「けれども、あんたの姿は俺のこれまでの人生の中心にあった」と続いていた<sup>6</sup>。またクリスチャン・Rも理想的な父の像を求めていた。一方アイゼンヒュッテン市の若者は父親と同居していたが、父親はその存在感を欠いている。そして父親が旧東時代に政治家と工場のボスの「言いなりに

なって、嘘を言われてだまされていた」となじっている。ここにも潜在的に父親の強い権威への憧憬がうかがわれる。

このように、クリスチャン・エッガースの精神分析をモデルとすると、三者には父の像が否定的に形成されていることと理想的な父への空しい憧憬が背中合わせになっていた。それでは母との関係はどうであったのか。

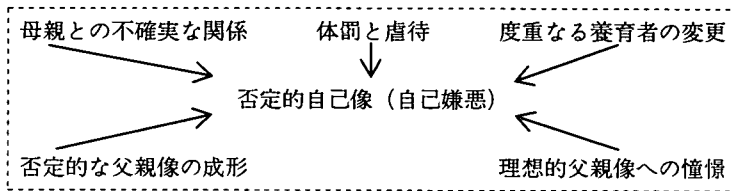
母との関係は一見して三者三様であるようだ。クリスチャン・Rの場合は「なんとなくむすびつけられていた」が、この相互に「満たされない期待」が二人の関係を際立たせていた。それは、クリスチャン・Rにとっては母の「揺るぎない愛情への願望」であり、母にとっては「愛する、賢い若者への願望」であった。二人は互いの期待を過剰に求めあい、そしてそこから失望が生じるという悪循環に陥っていた。ハッセルバッハは母親を数箇所語っているにすぎない。その中でかれが母親にたいする愛を語った箇所は、継父が「俺のことをつまはじきにし、ついには暴力」直前になると母親は「いつも俺の側についてくれた」にみられる。だが継父の「あまりの荒れ方に」母親も「途中で折れざるを得なかった」<sup>7</sup>。そしてそのあとに「あの頃、あんた（父親）さえいてくれれば」と続く。ハッセルバッハには、母親は一般のドイツ人の家庭の主婦に比してずっとその存在がかすんでいた。結局ハッセルバッハは家を出てプレントラウアーベルグ地区のヒッピー連中の部屋に入り浸る。それはかれらが「俺を本当に優しくしてくれたこと」、「そのかれらの生き方に魅了された」からであった。煙草をここで初体験する<sup>8</sup>。この告白はハッセルバッハがヒッピー連中に、喫煙という行為を見逃し、甘えを許す父の像を求めていたことをうかがわせる。ハッセルバッハの自伝においてかれが理想化した父親の像が非常に大きな位置を占めていたことがここでも肯ける。

さらにアイゼンヒュッテン市の若者は、母親の溺愛ともいえる庇護のもとにあったが、仲間より信頼できるとは言えない。そして母親も若者が難民収用施設を襲撃してもネオナチと親密な関係にあることを微塵も疑ってはいなかった。

さて、エッガースはクリスチャン・Rの精神鑑定<sup>9</sup>の結論して次頁のような図式を提示している。アイゼンヒュッテン市の若者およびハッセルバッハのケースではいずれも上段の母親との関係についてエッガースの鑑定に対応する事例は見出しえなかった。ここから結論を引き出すことは冒険であるが、この両者にはクリスチャン・Rのような否定的自己像はまったく見えてこない。したがって、クリスチャン・Rの場合はその否定的自己像がネオナチへの心理的動因となっていたと言ったほうがよい。一方、父親との関係でみると三者ともに共通している。ただしアイゼンヒュッテン市の若者には否定的な父親像が形成されているが、しかし心理的傷は見いだせない。こうしてみると、三例に限定されるものであるが、精神分析学上の病理的因子は、「危機社会」と同様に、ネオナチへの動因を示唆するものとなっても、ネオナチへの直接的結びつきを説明するものにはなっていない。むしろそうした病理的因子の複数性は、ネオナチへの入口が複数あるということを示している。

さらに注視すべきは、むしろアイゼンヒュッテン市の若者とハッセルバッハに共通する因子である。それは、社会主義国家にたいする二人の決算の仕方である。パンクスとなっていたハッセルバッハは「攻撃的な振る舞い」を「エスカレートする一方で、まわりの世界とあたりまえの付き合いを続けて行ける状態でなくなった」、そして「何といっても、他人に口出しをさせず、何者にも恐れぬ態度で事にあたる若者の仲間であることに」「自分のアイデンティティをついに勝ち取った」まさにそのときに、「東ドイツに別れを告げる覚悟ができていたのだと思う」と語っ

ている<sup>9</sup>。かれの父親は社会主義統一党の幹部であったが、この「覚悟」は父親に付きまとい、体制＝社会主義の權威にたいする決別を吐き出したものであった。ネオナチリーダーであったハッセルバッハは父親を憧憬しそして否定する、崩壊直前東ドイツの典型的な若者であったのだ。これに比してネオナチ「戦士」であるアイゼンヒュッテン市の若者は、前述したように、崩壊前の学校で教師の權威と父親が黨員であった社会主義統一党を、その幹部(「政治家と工場のボス」)に「嘘を言われてだまされていた」と語るように、蔑視していた。その語り口には、ハッセルバッハのように東ドイツ国家＝社会主義統一党と決別するという「覚悟」は読み取れない。



(Christian Eggers, op. cit., S. 251.)

### ネオナチの魅力と結束力

ハッセルバッハはメルン襲撃事件以降ネオナチから決別することを考えるようになる。だが「どうしても決別できなかった」。かれがその理由としてあげたものは、意外にも、「極右界以外には自分が頼れる人間が一人もいなかったからだ」。これは、既述したが、ネオナチ・ユーゲント周辺の若者が指導者組織に入ると「絶対にやめられ」なくなった理由と全く同じである。かれは組織からの決別を一旦決意しても、「暗黒で底なしの穴に落ち込むのではないか」というパニックに襲われた<sup>10</sup>。

この強い結束には、とくにスキンヘッズのグループではその服装(革製長靴、ボンバージャンパー)によって、つまり身体に刻印されたアイデンティティによって、固く団結した男たちと一緒にいるという絆が作りあげられていたとも考えられよう。だがこれこそがネオナチ組織の強い結束を特徴づけるものであったのだろうか。

組織では、若者は、孤立から救われ、仲間から信頼されそして指導者から「お前にも価値があるんだ」と評価された。とすると、この組織は友情や信頼にもとづく結束を重視したのだろうか。否である。ハッセルバッハによると、「イデオロギーによる結束」こそが組織メンバーによって重視されていたのだ<sup>11</sup>。友情や信頼は揺らぐが、それにもかかわらず組織自体は動揺のない「非常に堅固な世界観」の「信条共同体」であった。組織自体のこの堅固さこそが、メンバー間の強い信頼関係を保証する担保となっていたのだ。

### 「イデオロギーによる結束」と暴力

ネオナチの組織が「非常に堅固な世界観」の「信条共同体」であったこととネオナチの暴力行為とは、すでにみたように、関係があった。その箇所をもう一度要約すると、ネオナチの行動目標である「革命」は「不満の渦巻くあらゆる地」または「暴力が支配するあらゆる地」にネオナチが出向いて企てられる。したがって、指導者がその戦士と周辺のスキンヘッズに市中の真っ只中に「不満を煽り」「暴動をおこさせる」ことは戦略上、不可欠であった。ハッセルバッハは若きリーダーの一人として、「外国人敵視を煽るスローガン」で他のネオナチ・ユーゲント

とスキンヘッドを「そそのかしていた」(一時ロストック襲撃事件の黒幕はハッセルバッハと報じられたが、しかしそれは事実ではなかった)<sup>12</sup>。そして攻撃の実行者である戦士、たとえばメルン事件のあのクリスチャンゼンとペータースは「殉教者として褒めたたえ」られたのである<sup>13</sup>。

アイゼンヒュッテン市の若者の話によると、難民収容施設にたいする襲撃(投石)はロストック事件をきっかけとしていた。この襲撃を、「それはあなたにとっていやなことではなかったの。」の質問にたいして、「ちっとも。」と応じていた。それは、かれがネオナチのあの目的と戦略に従っていたからであろうか。おそらく、かれの仲間同様に、難民収容施設がネオナチ戦士の襲撃目標となっており、その襲撃に加わることがネオナチに一体化している自他の証となったと予想される。だがここではまだそのように即断してはいけないうだ。

ハッセルバッハは暴力行為の瞬間を次のように語っている。「誰かに殴りかかる時、俺はよく声をあげた。叫ぶことによって不安が消滅し、あまり逡巡することなく暴力を振るえる状態になるのだ。」「俺は他の者の「模範」でなければならず、隙を見せてはいけなかった。いつの間にか暴力は俺の日常と化し、それは俺の面に刻み付けられ、俺の姿かたちとなった。」「他人を襲い殴りつける時、楽しんでいなかったと言えば嘘になる。この感覚は、かつての仲間のほとんどが共有している。中には、人を殴っている時に目がらんらんと輝いている奴もいる。」<sup>14</sup>。この独白は、「力と強さの空想は自己の弱さによるべなさを防御する」という精神病理の典型を物語るものでもある(グリューン『正常の中の異常』1987年)<sup>15</sup>。この限りでは、ハッセルバッハの行為は犯罪者のそれと大差ない。

だがこの行為の対象が、難民とトルコ人へ変化していったことに注意がむけられるべきだ。アイゼンヒュッテン市の若者にとって、難民はポーランド人に象徴され、ドイツ史に刻み込まれたポーランド人にたいする蔑視→排除が難民一般にたいする若者の見方を形づくっていた。さらに、トルコ人は、ドイツ人の職場を奪い、自分自身が願望する消費文化を享受しているという決めつけがみられる。かれの暴力はこのように意味づけられた対象に向けられたのだ。この攻撃には、だから、自己自身の行動の意味と対象の意味づけとの間に、確固たる言い分があった。その言い分の正体こそが、空間的には分散し、互いに個人的に接触することのないネオナチ・ユゲントとその周辺の若者を結束させ、同一の価値と解釈の範型を志向させ、方向づけるもの、まさしく世界像＝イデオロギーであったとみななければならない。

## 二項対立的世界像の構築

インタビュー後半になると若者の口からナチズムのイデオロギーの断片が、難民＝外国人にたいするかれの判断の根拠を示す時に、吐き出される。例えば、難民排除の理由として、すでに収容能力が限界にたっている状況に「ボートは満員だ」というスローガンが持ちだされ、ドイツが「より大きな国家」となる必要性については、「イスラエル人はドイツについて文句ばかりいっている」という理屈が対置された。さらに難民はポーランド人に象徴され、ナチ時代にユダヤ人とほぼ同じように刻みこまれたポーランド人にたいする蔑視→排除が難民一般にたいする排斥→攻撃を説明する枠組みとなっていた。

そればかりではなかった。ドイツ人のモラル、あの秩序と清潔もまた、ごみ箱で衣類などをあさる難民にたいして不快感と蔑視を表出させた。大都会では難民は犯罪組織を作っているというイメージも作られていた。またトルコ人にたいしてはドイツ人の職場を奪い、自分自身が願望する消費文化を享受する象徴として意味づけられている。



若者の思考のパターンが次々と吐き出される。それは難民を差異化された他者としてつねに自己に対立的に布置していた。そしてその自己と他者とは優位－劣位の関係として図式化されていた。この二項対立的図式では、劣位者は劣等化され・侮蔑され・差別され・排除されている。この図式にイデオロギー的な正統性をあたえたものが、ハイデルベルク宣言にみられるようなネオナチズムであった。さらにこれに社会的ないし潜在的な同意を付与したものが、ドイツの時代状況（難民と失業の急増）と伝統的モラル、そして政治的潮流（政党間の対立を回避する連合＝総与党化、新たなナショナリズムの登場、亡命権改正、既成政党にたいする若者の否定的傾向の増加）であった、と考えられる。

#### ネオナチ・ユーゲント現象は一過性の世代文化か

1997年、ネオナチの活動が、1922/23年と同じように、活発になっている。5月1日、ベルリン市とライプチヒ市でともに約7千人規模のネオナチデモが企てられた。同年早々にドイツから発進されたニュースは失業者の戦後最悪更新であった。その実数は4百67万3千人に達し、前年に比べ40万人増加したと。3月2日に行われたヘッセン州のいっせい地方選挙で極右政党の共和党は6%台の得票をえていた(1993年では8%台)。その一方で緑の党などの革新政党の共同が実現し、その名簿が10%台を得た選挙区もでた<sup>16</sup>。選挙後も雇用情勢の悪化が報道されている。3月14日に、ベルリン市で建設労働者1万5千人が雇用対策をコール政権に訴えた。現在ベルリン市には首都移転関の連建設現場が集中している。その現場には多数の外国人労働者が低賃金で雇用されている。それが、とくに建設労働者の低賃金と失業の原因となっている、という理解は労働者の間で支配的になっている<sup>17</sup>。ネオナチの活動はこうした失業増加－雇用対策の不備の状況のかんで再び路上に現れ、外国人排斥を扇動している。

さて、この現在の時代状況、とくに失業増加－雇用不安が「失業と生きる指針の喪失と将来への不安」を生み出した（1章の「危機社会」）とみることに異議を差し挟むものはないと思われる。そしてこの時代状況に、1922/23年当時とは違って、DDR崩壊による「価値観の真空状態」とこれに起因する「方向性喪失」が依然として蔓延していることに同意するものもないと予想される。とすると、このネオナチの活動は、「危機社会」における「経済的悲観主義」が「アイデンティティの危機」を招来し、これが「ナチズムへの共感という要因」と「結合」したことに起因する、とみななければならないのであろうか。

ここで、非常に素朴な疑問が直ちにでてくるであろう。すなわち、その「結合」相手が何故一市民のフォーラムおよび右翼または左翼でなく「ナチズムへの共感」なのかと。まさしく最初の疑問に再び逢着せざるをえない。

もし、上記の「危機社会」説を採るならば、その危機の発生に対応した若者のアイデンティティ危機は、まさしく一過性の、若者に特有な、限定されたアイデンティティ危機に陥った一世代文化現象ということになろう。だが、これまでのレポートからみて、この解釈と、ネオナチ・ユーゲントおよびその周辺の若者が語るその行為の再現＝自己解釈との間には、率直に言って、著しい乖離が横たわっている。

同じ「危機社会」下であって、ハッセルバッハとあの若者には共通した精神史をもっていた。それは、思春期に父親の権威にたいする反抗と服従を体験せずに、しかも青年期にDDRの権威崩壊に直面していたことである。そのために、両者には前の世代＝体制全体を否定する指向性が強かった。それは両者におけるアイデンティティ危機であったとみななければならない。さらに両者は、社会的にドロップ・アウトしていた（とくにハッセルバッハは刑務所体験が長い）。

そのために両者はその危機を、否定的なアイデンティティーネオナチズムとネオナチ組織への同一化によって、脱出する途を選んだ。その理由は、第1に、その組織は、幹部組織の全国的なネットワークをもち、各組織は幹部（指導者）とその周辺のスキンヘッドから編成されていた。第2に、その組織は、周辺にいるドロップ・アウトした一人一人の若者の存在価値を評価するプログラムをもち、さらに互いが信頼しあえるという確信を与えた。第3に、ネオナチズムが、ドイツ人が失業せざるをえない理由を説明することができると同時に、かれらが主体となってそれを解決する戦略を提示することができた。第4に、そのイデオロギーの特質は、二項対立的な図式で構築されており、それは同時にドイツ市民の日常生活（生活世界）における思考パターンと共感ないし共有されるものであった。

以上の4点にもとづくと、ネオナチ・ユーゲントはアイデンティティ危機を、ネオナチズムと組織に同一化することによって脱しようとする世代文化を共有している。ところで、思春期から青年期にかけて父親の権威喪失によるアイデンティティ危機はまさしく時代状況として、ネオナチ・ユーゲントのみに現れるものではなく、可能性としてはこの世代一般に現われる。しかし、同時にドイツ国民のもっとも緊急を要する、しかも国民の生存にかかわる社会問題（戦後最悪の失業）に主体的に関与（発言・行動）する世代のうち（このなかには左翼の青年もいる）、ネオナチズムとその組織に同一化する世代こそがネオナチ・ユーゲントであった。それゆえに、このネオナチズムとその組織がドイツ社会の日常性に存続することができるかぎり、ネオナチ・ユーゲントも作り出されていくであろう。

こうしたネオナチ・ユーゲントの日常性に潜む世界を知ることなしに、「極右の思考様式」および「ドイツ人が右翼急進主義を支える」現実を理解することはできないであろう。依然として「ネオナチ・ユーゲントは路上では見えてこない、殺人を犯したときに初めて見えてくる」と繰り返し言い続けられることになる。だがソーリンゲン襲撃事件を契機に学生はこの「見えてこない」世界に自らの日常性を厳しく批判することによって立ち向かおうとする行動を起こした。この学生もまた一つの世代文化を成す。その世代文化は、この見えざる世界に、自己の日常性の人種主義・民族主義を暴くことによって、相互に批判しあうことによって、対抗する自発的なフォーラムを作り出した。もちろん行政の厳格な取り締まりは不可欠である。だがそれは一つの方法にすぎない。この自発的なフォーラムはネオナチ・ユーゲントにたいしてどのような決着をつけていくのか。

### おわりに－問題の提起－

#### 政治現象としてアプローチする限界

1998年の連邦議会選挙結果(%)は(括弧内は前回1994年の結果) SPD(社会民主党) 40,9(36,4), CDU(ドイツキリスト教民主同盟) 28,4(34,2), CSU(キリスト教社会同盟) 6,7(7,3), Gruene(緑の党) 6,7(7,3), FDP(自由民主党) 6,2(6,9), PDS(民主社会主義党) 5,1(4,4), REP(共和党) 1,8(1,9), DVU(ドイツ民族同盟) 1,2(-,-)であった。周知のように、SPDの躍進・勝利が紙面を賑わしていた。その一方でREPはほぼ横ばい、DVU伸張については内外の新聞ともにほとんど注視されなかった。だが雑誌『フォーカス』は異彩を放っていた。同誌はDVUについて特集頁を組んでいる。以下でその概要を伝えておこう。

DVUは、1971年に右翼の小グループの集合体として出発し、1987年に現在の党名を名乗り、

1997年ではハンブルク地区選挙で5%条項を突破し、俄にその存在がクローズアップされた。『フォーカス』は、30歳以下の30%が極右政党に投票し(SPDには22%)、この内4年前の選挙で投票しなかった多数をDVUが今回の選挙に動員したことに注目している<sup>18</sup>。

若い年齢層に極右政党への支持者が依然として一定の層をなしていることがうかがえる。今回動員された年齢階層は極右主義への支持層であったとみてよい。ところでこの支持層は全体では13%にのぼっている(1979-80年)とする調査報告がある。だが共和党の得票率はほぼ1,8-1,9%である。したがって、極右主義への支持層は極右政党を必ずしも支持しているのではない。政治学はこのズレにたいして次のような回答を用意している。「通常、極右主義の立場の人は、主に政党システムの多様性の中に統合されている」こと、および「時代精神を右に転換することに努力する小規模の知的サークル・出版社・知識人たちが「ドイツの保守主義と極右主義の間に、「ちょうつがい機能」を果た」している<sup>19</sup>。

それでは、なぜ30歳以下の1/3と国民の13%が潜在的な極右主義への支持層となっているのか。この疑問は依然として氷解されないままである。やはり、視点が極右政党への支持傾向をもって政治文化を読み取ろうとすることの限界に突き当たらざるをえない。

### 見えない顔—インターネット化するイデオロギー共同体

わたしは、1992-93年のベルリン滞在中に、ドイツの歴史=文化の現在を如何にして自己の問題としうるかをひとつのテーマとしていた。このレポートはそれをネオナチ・ユーゲントに絞って、主として新聞情報とちょっとしたインタビューと体験をもとに、滞独中にメモしていたものを1994年の夏に一举に脱稿したものである(その後の発表にさいして新たな文献を読み加えている)。当初このレポート(1)(1995年5月)、同(2)(1995年10月)については実証を欠き「解釈も恣意的で説得力に欠ける」という手厳しい批判を受けたが<sup>19</sup>、現在でもそのテーマの意義とアプローチについては—やはりこの批判を甘受しなければならないが—現代にかかわるひとつの仕方として次の理由からますます確信を深めている。

第一に、実証の資料が現在でも前述したように憲法擁護局の報告、支持政党別投票行動(世論調査)および政党の主張に依拠しており<sup>20</sup>、外国人襲撃に走る「極右スキンヘッズ」の「ほとんど」が「ネオナチ・グループやその他の「極右」組織のいずれにも属していない」としながらこの若者層を「どのように把握するのかについて専門家も頭を痛めている」という昏迷した状況を脱していないこと<sup>21</sup>、その一方で、第二に、わたしの解釈を支持するレポートが現れ、第三に、ネオナチの動きに新たな変化がみられ、それを追跡する研究者フォーラムのレポートが公表されていることである。ここでは第二と第三の点についていくつか紹介しておくたい。

第二のレポートとは、カルフォルニア大学バークレイ校アレン・サムソンの「ドイツのネオナチグループ—組織、イデオロギーそして社会的文脈」(1997年)である<sup>22</sup>。本レポートはインターネットでアクセスしたものだが、一読して文字通り驚いたのは、かれの主張が、奇しくも、わたしのレポートとほぼ同一であったことである。かれも、「ネオナチと前政治的なスキンヘッズとの間にかなりの連結があり」、「インフォーマル・スキンヘッズの知的メンバーはネオナチとの接触を維持している」という「新たな発見」をしている。そしてネオナチ運動の構成は「中核メンバー」(「指導者」)と「戦士」<sup>ソルジャーズ</sup>からなり、「戦士」<sup>ソルジャーズ</sup>がネオナチズムに同一化したスキンヘッズであった。かれもスキンヘッズとネオナチとを「区別する主要な基準の一つ」を「イデオロギー上のアイデンティティの深さ」にあるとしている。

第三についても、1998年にインターネットでアクセスしたものである。一つは1996年度『憲

法擁護局報告書』である<sup>23</sup>。報告書は、極右スキンヘッズのほとんどが「ノーマルな外形」とりはじめていること、このことはかれらが「極右の行動様式からの離脱を意味しない」という変化を指摘している。そして極右スキンヘッズの「敵の像」は「ネオナチの敵の像と一致」していると分析しているが、「ただし世界観は、実践的・イデオロギー的にみて、ネオナチと同じであると確定されない」と従来からの公式見解を繰り返している。

スキンヘッズとネオナチの最近の顕著な変化についてフォーラム「ゲセルシャフト・フュール・ゴリーチツシエ・アウフクレーレング政治的啓蒙会」(事務局はインスブルック大学政治学研究所ラインハルト・ゲルトナー氏等 HYPERLINK <http://gfpa.uibk.ac.at/per> <http://gfpa.uibk.ac.at> ここにはわたしが敬愛するベルリン自由大学マイネッケ研究所のプロイセン近代史研究者ヴォルフガング・ノイゲバウアー博士も参加している)は、かれらが普通のドイツ人の素顔に戻り、中核メンバーと戦士との分散的關係がインターネット化したという点に注目している。研究会がアタックした対象はまさしく World Wide Web にある。わたしも検索したところ、ちょっとした驚きであったが、サーバーは465件あった。研究会はネオナチのインターネット化された「潜れた世界」の探索に着手している。ここではクリスチャン・フラッツの報告「World Wide Web にみる極右主義」<sup>24</sup>を紹介しておきたい(「極右」はネオナチとその戦士を含むと読み替えてよい)。それによると、「極右」を特徴づける「最も重要なメルクマール」は「イデオロギー」と「政治的目標設定」であった。とくに「イデオロギー」については「特殊な、主体にとって論理的に一貫した世界像」となっており、「フォルク民族」と「フォルクスゲマインシャフト民族共同体」が強調されている。これが「政治的目標」である外国人排斥と自民族中心主義をうみだしている。インターネット化したネオナチには、そのイデオロギーから、現体制の議会制原理を否定すること、「敵の像を作り出す」ことと「世界の悪の身代わり」を見つけだすこと、同時に「強力な権威主義的国家」の実現を促すこと、そして個々人の行動の準則を「ヴァイア・ダフユールわれわれ感情」としていることが見えてくる。

#### 再び問題の原点へ

ネオナチが市民化し、その指導者-戦士の運動がインターネット化することにより、その姿はますます公然の世界から隠れていく。そして政党の支持傾向にも目立った変化を徴さない。これがいまのネオナチの日常性なのだ。だが、サムソンと政治的啓蒙会のレポートは奇しくもその日常性が非常に堅固な「信条共同体」であったとする若きネオナチリーダーであったハッセルバッハの証言を裏付けるものとなった。この共同体の周辺に、一人一人異なった否定的な精神史をもつ自己をネオナチのイデオロギーと組織への同一化によって脱する以外の途を見いだせない若者がいることを見失ってはならない。その数がたとえ少数であってもである。その数ではなく、メルンとゾーリンゲンのトルコ人にたいする襲撃がドイツの日常性の只中で公然と行われた状況こそを、わたしは如何にして己の問題とすることができかを在独の証として問わなければならなかった。このレポートは、わたしの歴史研究に先立つ、時代状況にたいする関わりかたを己に問うたものである。

#### 註

(引用文献の初出は前稿より引き継ぐ)

1 Der Tagesspiegel, 7.6.1993.

2 Der Tagesspiegel, 4.6.1993.

- 3 Wochenpost-Zeitung für Politik · Kultur · Wirtschaft · Unterhaltung-, 8.11.1992. 以下のプロトコルは本紙からの再録である。
- 4 「現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化(4)」上越教育大学研究紀要第17巻第2号, 1998年の(4)「ゾーリング放火犯少年の精神鑑定」523-525頁。クリスチャン・R 関係の記述はここからの引用である。
- 5, 6 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書23, 24頁。Ingo Hasselbach, Die Abrechnung. Ein Neonazi steigt aus. Aufbau-Verlag, 1994, S. 11f. 訳文を少し変えている。
- 7 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書26頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 14.
- 8 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書25頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 14. 訳文を少し変えている。
- 9 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書29-32頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 15-18.
- 10, 11 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書193頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 148f.
- 12 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書190頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 146.
- 13 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書191頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 147.
- 14 インゴ・ハッセルバッハ前掲訳書201頁。Ingo Hasselbach, op. cit., S. 153.
- 15 A.Gruen, Der Wahnsinn der Normalität, Realismus als Krankheit. 2. Aufl., München, 1987, S. 52.
- 16 Die Zeit, 3.3.1997.
- 17 Der Tagesspiegel, 15.3.1997.
- 18 HYPERLINK <http://focus.de/D/DI/DIEG/dieg.htm> <http://focus.de/D/DI/DIEG/dieg.htm> 98/10/07 我が国の文献では、坂井榮八郎・保坂一夫編『ヨーロッパ＝ドイツへの道 統一ドイツの現状と課題』東京大学出版会, 1996年, 175-176頁。
- 19 姫岡とし子「ヨーロッパ 現代ドイツ」『史学雑誌』第105編第5号「1995年の歴史学界－回顧と展望－」1996年, 375頁。
- 20 例えば最新の成果として、高橋秀寿『再帰化する近代－ドイツ現代史試論 市民社会・家族・階級・ネイション』国際書院, 1997年, 190-200頁および大野英二『ドイツ問題と民族問題』未来社, 1994年第4章を参照。
- 21 佐瀬昌盛「統一ドイツと過激排外主義（下）－極右するドイツ人の「外国人敵体性」－」『国防』1993年11月, 66頁。および仲井斌は「91年, 92年の外国人に対するゲヴァルト行使は」と断ってであるが、それは「極右によって組織, 操縦されたものではなく, 多分に自発的なものであ」とみている（同『現代ドイツの試練－政治・社会の深層を読む』岩波書店, 1994年, 232頁）。
- 22 Alain Samson, Germann Neo-Nazi Groups. Organization, Ideology, and Social Context. In: <http://www.Vtex.net/samson/paper.htm>
- 23 Verfassungsbericht 1996-Kapital 2. In: <http://www.verfassungsschutz.nrw.de/jhar96/2-4.htm>
- 24 Proseminararbeit: Medien und Rechtsextremismus. In: <http://gfpa.uibk.ac.at/art/0007.htm>

[付記]本報告の主要箇所は上越教育大学現代文化研究会10月例会（1998年）で発表したのが、その折りに諸兄から貴重な提言をえることができた。記して謝意を表したい。

## Die Kultur der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland (5)

Mitsuo MASUI\*

### RESÜMEE

Was ist die Ursache von der Entstehung der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland? Man versteht die folgenden drei Punkten als die Ursache davon: (1) die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels, (2) das Zusammenbrechende Familienleben, (3) die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts. Aber konnten wir die Entstehung der Neonazi-Jugend durch dieser drei Punkte entsprechend verstehen? Ist es denn möglich, das die zweckmöglichen Taten, die den Antisemitismus, Großdeutschismus, und Gewalt anrichten, im psychologischen Vakuum und zwar ohne den starken Werken auf die Welt hervortreten? Das alltägliche Lebenswelt der Jugend im Wandel bringt uns das ganz anderen als das schon oben Verstandene.

#### [Inhaltsverzeichnis]

##### Einleitung

1. Die Möglichkeit des Verstehens der Kultur der Neonazi-Jugend
2. Das alltägliche Lebenswelt der Jugend im Wandel
  - (1) Die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels
  - (2) Das Zusammenbrechende Familienleben
  - (3) Die Alltäglichkeit der Gewalt in den Schulen
  - (4) Die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts \*1
  - (5) Praktik des <höchsten> Werts
  - (6) Orietierung der starken Weltanschauung \*2
3. Organisationen und Taten des Neonazis \*3
4. Alltäglichkeit einer Neonazi-Jugend \*4
- Zusammenfassung \*5

\*1 Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol.15, No.1. 1995.

\*2 Studies on Hisotory of Western Education, Vol.24. 1995.

\*3 Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol.15, No.2. 1996.

\*4 Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol.17, No.2. 1997.

\*5 Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol.18, No.2. 1999.